



写真-1 加古大池のひとつ・跡池、堤防の向こうは南大池（平成27年5月撮影）

■ 印南野台地の広大な原野を拓く

印南野台地を東西方向に走る主要地方道 65 号・神戸加古川姫路線と南北に走る主要地方道 84 号・宗佐土山線が交差する付近に『加古大池』があります。満水面積 48.9ha、甲子園球場 12.7 個分の広さです。

兵庫県には約 38,000 個（平成 27 年 4 月時点）の溜池があり、その中でも加古大池の広さは「県下一」ですが、全国的にみても香川県の満濃池、大阪府の狭山池に次いで 3 番目の規模を誇ります。

印南野台地の大部分は水利に乏しく、近世になるまで広大な原野が未開発のまま残されていました。江戸時代になり平和な時代が続くと人口が増加、それが新田開発を促します。

慶安 2（1649）年に姫路藩主となった榊原忠次も新田開発を奨励したことから、開発の障害となっていた水利調整もできるようになり、土木技術の進展も相俟って新田開発や溜池の築造が盛んに行われました。

今回は、中西条（なかさいじょう）村の庄屋・加古澤兵衛が中心となって取り組んだ加古新田の開発、加古大池および加古大溝築造の歴史をまとめてみました。



写真-2 加古大池（兵庫県 HP から引用・加工）

■ 加古澤兵衛らが開発した加古新田

加古新田の開発は、万治元（1658）年、加古澤兵衛が姫路藩に提出した開発願いに始まります。

26歳で中西条村（現・加古川市八幡町）の庄屋となった澤兵衛は、村の東にある広大な原野を開拓しようと考え、試みに3年間、高所に麦・稗（ひえ）・大豆・小豆などを植え、水のある低地には稲を植えて、それなりの実りが得られることを確かめ、さらに3年間、実際に住んでみて寒暑に耐えられることも確かめました。

その上で、上西条村の組頭・沼田喜平次、下村の庄屋・本岡治兵衛の賛同・協力を得て、印南野台地の開拓を、上西条村の大庄屋・沼田与次太夫を通じて姫路藩に願い出しました。

願いを受けた藩は、奉行の富塚久右衛門と安藤左近右衛門を現地に派遣しますが、あまりの荒れ地に驚き「かような荒野開発致し候とも、人倫（人）の住居は申すに及ばず、流溝（るこう：灌漑用水）のかかり心もとなく、しかるところ五穀の実り候こと思いもよらず。しかるところを御上様へ御苦勞申し上げ候こと存じよらず。このようなことを願い出るとは何たる不覺者」と三人を叱りつけました。

しかし、澤兵衛たちはひるまず、実地体験から得た自信を基に水を得る方法等を熟っぽく役人に説明しました。後日、役人から内諾が得られ、万治4（1661）年正月に新田の大絵図と目録を作成して奉行に差し出します。同年2月、正式に開発の許可が下りました。

開発区域は、東が野寺との境、西が見谷まで、北は上西条下村の上大沢まで、南は長府池北山村北の辻までの、東西5km、南北2kmの範囲です。この時、澤兵衛は「祖先より受け継いできた苗字から“加古新村”と名づけたい」と申し出ますが、「苗字を村名にすることはできない」と認められませんでした。そこで、澤兵衛は、新村では自分の姓名を「澤才兵衛」に改めるとして、村名を「加古新村」とすることが許されました。寛文2（1662）年才兵衛・喜平次・治兵衛は、「頭百姓（とうびやくしやう）」として加古新村に移住します。

姫路藩も新田開発を積極的に支援するために、同2年、池満普請として人夫10,217人を動員し、その日当として1人1日米7合5勺を支給しました。これにより、加古大池の前身となる「五大池」（南大池・北池・跡池・中池・五軒家池）と宮山池※1、および延長2,500間（≒4.5km）にわたる流溝（水路）が完成し、23軒が入植します。

その後も入植者は増え続け、寛文9（1669）年までに163軒、人口800人あまりが入植し、191町歩の耕地が拓かれ、加古新村の基盤ができました。延宝8（1680）年には、上西条の氏神・八幡宮を新村に勧請しました。

※1 宮山池：八幡神社のすぐ北にあった小池。戦中から戦後にかけて埋め立てられた。

■ 未完成の顕彰碑～八幡神社「弁慶の硯石」

加古大池の西にある八幡神社の境内に、習字に使う「硯」に似た石があります。昔から「弁慶の硯石」と呼ばれていたそうですが、近年になってようやくその由来（「弁慶の硯石」の横の説明板に記載）がわかりました。

「加古新村」ができて90年ほどが過ぎた頃に、加古新村を開発した才兵衛ら3人の功績を称えるために顕彰碑を建てることになりました。建てる場所を決め、碑石を磨き上げ、碑文の草稿も宝暦2（1752）年までにできていたそうです。ところが、草稿者の一人・清田孫蔵が死去したことなどから、顕彰碑が建立されないまま放置されてしまいました。



写真-3 八幡神社



写真-4 「弁慶の硯石」

ただ、加古土地改良区からいただいた資料の中に、別の事情も加味した資料があったので追記しておきます。

未完成記念碑について

加古新村は万治年間（1658～1661）に開発されたが、次々に開墾される耕地に対し、灌漑用水が伴わず、年々干ばつに悩まされることが多かった。

明治 9 (1876) 年、大溝水源を補う河原田井の改修工事が完成したことで、年々開墾が進められたことと相俟って村は漸く安定期に入り、住民の生活にもややゆとりができて来た。明治 30 年代の中頃に、村は開発者達の功績を称えるべく顕彰碑の建立に取りかかっていた。たまたま当時、村と開発者の遺族との間に争いが起こり、やがて訴訟事件にまで発展するということがあって、その余波を受け、顕彰碑の建立が中止されたという。

やがて訴訟事件そのものは明治 39 (1906) 年に円満解決されたが、顕彰碑建立の議は再び起こらなかった。一方建設中の碑石は工事半ばにして放置され、近隣の子供達の間で「弁慶の硯石」と称された一時期があったが、やがて草に覆われ、落葉に埋もれて人目につくことなく、また語り継ぐ者もなくなっていた。

昭和 60 (1985) 年神社境内を公園化することになり、その作業中にこの未完成の碑石が発見されたのである。おそらく出来ていたであろう碑文の原稿なども一切残っていないようである。

■ 五大池の水源地確保に苦闘する

加古大池の前身「五大池」の水源は、当初、隣の母里村の風呂谷池の余水に求めています。その風呂谷池の水源は、練部屋の西北約 500m にある吉生邑（よひむら）の井戸でした。風呂谷池の余水を延長 3km の承水路（地元では四百間溝（≒730m）と呼んでいる）を築いて五大池まで引水しました。

寛文 9 (1669) 年には、水需要の増大に対応して水路拡張と 6 ヶ所の新池（茨池、三軒屋池、四軒屋池、六軒屋池、七軒屋池、八軒屋池）が築られました。しかし、その後も新田開発は非常な勢いで進み、その結果、従来からの水源による灌漑は、限界に達してしまいました。

そこで、延宝 8 (1680) 年、草谷川から導水する計画が立てられ、草谷川下流のハカ郷(野村・下村・宗佐・船町・上西条・中西条、下草谷、草谷)へ非灌漑期に草谷川から取水することを願い出ました。本来であれば容易に同意が得られるものではないですが、「田畑にあまり水を必要としない7月から翌年 4 月までの期間(旧暦)に取水することができる」との了解を得ることができました。

加古新村の場合、新田開発の中心になった才兵衛・喜平次・治兵衛が、同じ川郷^{*2}の中西条・上西条・下村から出ていることで、加古新村は川郷の枝村的な性格を持っていたこともありますが、それにもまして姫路藩の後押しが大きかったことが考えられます。



図-1 加古大池関係施設等の位置図

五大池の北を流れる草谷川は五大池より低いいため、水を引くためにはかなり上流で取水する必要があります。草谷川の上流に大溝井堰を設け、野寺村内を通り五大池まで約 3km にも及び用水路を造りました。これが、加古大溝（おおみぞ）です。

その後も開発は進み再び水不足になると、加古大溝の補強を目的として、宝永 7（1710）年に大溝井堰の上流約 600m の地点にある河原田井堰※3から直接加古大溝に引水する契約を広谷村と結んでいます。河原田井堰には余水があり、この余水には取水時期に制限がないため加古大溝の取水条件（非灌漑期限定取水）を補うことができます。これにより加古大溝の用水問題は著しく好転しました。



写真-5 加古大溝（加古大池への流入部）

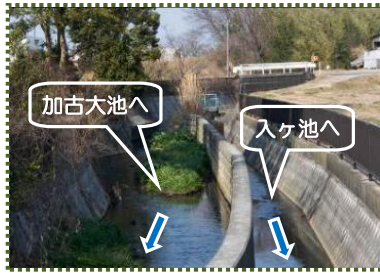


写真-6 加古大溝分岐部



写真-7 大溝井堰取水口（今は使われていない）



写真-8 草谷川 河原田井堰

※2 川郷：江戸時代、同じ川筋、あるいは水源を同じくする流れによって溜池を作り、用水を取る村々。一つの池を大きな用水源とする村々を「池郷」というのと同じ。

※3 河原田井堰：河川改修の際にゴム製起伏堰に改築されている。操作室壁面の銘板には「平成 12 年 6 月設置、施主・神戸土木事務所」と記されている。そういえば、ここは神戸市西区、当時は明石藩だった。

■ 5 つの溜池を統合～県下一の広さを誇る「加古大池」誕生

時は流れ、五大池は明治 24（1891）年に完成した淡河川疎水から加古支線を通じて用水を受けることとなります。大正 14（1925）年には河原田井堰の改修も完了し、水源は一応の安定を見ますが、溜池の老朽化に伴い堤体からの漏水量が増加、用水も不足をきたすようになりました。そこで村を挙げて対応に奔走した結果、県営事業により 5 つの溜池を統合する大改修を行うこととなり、外周の堤防を嵩上げして容量増を図るとともに、内側に残された各池の堤防は消波効果を期待して残すことに。そのため、水位が下がると、跡池、中池、五軒屋池を仕切っていた堤防が姿を現します。（下の写真-9・10）



写真-9 跡池と中池を仕切っていた堤防



写真-10 中池と五軒屋池を仕切っていた堤防

工事は、日華事変たけなわの昭和 16（1941）年 2 月に着手しますが、同年 12 月開戦となった太平洋戦争の影響をまともに受け、労務・資材の乏しい中、8 年の歳月をかけて昭和 24（1949）年 3 月に完成しました。

統合された池の名称が『加古大池』。この時の貯水量は 1,165 千 m^3 でした（現在の利水容量は 1,300 千 m^3 ）。

なお、現在は淡河川疎水を引き継いだ東播用水（平成 4 年完工）から用水を引き入れています。

■ 防災機能を付加

加古大池は、現在東播用水から受水していますが、加古大池から流れ出た水は満溜池を経由して一級河川・加古川の左支川・曇川に流入します。その曇川沿川の浸水被害を防除するため、昭和63（1988）年度から平成13（2001）年度にかけて防災ダム事業が実施されました。

事業では、まず堤体の安全性向上を図るため、旧堤体の前面に盛土を行い前面コア型堤体に改築し、張ブロックにより法面保護を行っています。また、洪水吐については、約327千 m^3 の洪水調節容量を確保するとともに、非常用洪水吐の放流能力の向上を図っています。なお、堤体の盛土材については、貯水池内の堆積土141千 m^3 を浚渫し、これを充当しています。



写真-11 加古大池の洪水吐

■ 広大な親水空間を活用してレクリエーションのメッカに

防災ダム事業実施時に併せて、一周3kmの遊歩道、親水護岸、芝生広場、管理棟等の施設が整備され、ピオトープでは水生植物や水生昆虫の観察もできます。

また、溜池としては珍しいウィンドサーフィンや、カヌー、ウォーキング、釣りをする人も多く、レクリエーションのメッカにもなっています。のんびり釣り糸を垂れているおじさんに何が釣れるのか訊くと「マブナとコイや。狙っているのはマブナやけどな。」とのこと（ヘラブナもいるそうです）。

気になる外来種について加古土地改良区の坂田理事長にお聴きすると、「ブラックバスやブルーギルもいるが、最近ブルーギルが食用としているエビが増えてきているのでバランスがとれてきているのかもしれない。」とのことでした。



写真-12 ウィンドサーフィン（南大池）



写真-13 釣り（南大池）



写真-14 釣り（南大池）



写真-15 カヌー（跡池）



写真-16 カヌー「頭、気をつけて！」



写真-17 ウォーキング（跡池畔）

■ モノローグ

河原田井堰からの引水（P.3 参照）が、集水面積が増えるわけでもないのに、どうして加古大溝の補強になるのかよくわかりませんでした。加古土地改良区から頂いた資料（「広谷川水利事件」岩坂茂正 昭和 60 年 4 月）を読んでようやく理解できました。

堰を越えて草谷川に落ちる水は草谷ハカ郷の了承が必要ですが、堰から取水した水を直接加古大溝に引水するのは広谷村の了承さえ得られれば OK という理屈なのです。

これにより加古新村は取水時期に制限のない水を確保したわけですが、このことが大正 12（1923）年の河原田井堰改修をきっかけに、草谷川ハカ郷と加古新村の 11 年に及ぶ水利事件に発展します。昭和 10（1935）年に和解が成立しますが、水利調整はほんとうに難しいですね。

タニウツギ

スイカズラ科タニウツギ属の落葉低木。別名ベニウツギとも呼ばれ、地方名でダニバナ、田植えの時期に花が咲くのでタウエバナ（田植え花）とも呼ばれる。和名のとおり山地の谷沿いの沢に近いところに生える。梅雨の時期に山道を通ると新緑の中で咲くピンクの花はひととき映えて見えるので見つけやすい。ウツギは漢字で卯木あるいは空木と書くが、卯木は卯月（陰暦 4 月、陽暦 5 月）に咲くからといわれ、空木は小枝が中空なのでその名がついたものである。樹高は 2～5m、花期は 5～7 月。花色が美しいため、古くから公園や庭園などに鑑賞目的で植栽されることも多い。また、若芽はヨモギの代わりに餅などに入れて食べる。南大池付近に咲いていた（多分）。



写真-18 タニウツギ（南大池付近にて）

【参考資料】

- 1 『兵庫のため池誌』 兵庫県農林水産部農地整備課編集 昭和 59 年 3 月
- 2 『稲美町のため池～加古大池』 稲美町商工会 HP <https://www.inami.or.jp/more/page4.html>
- 3 『赤い土』 小野晴彦 平成 4 年 4 月
- 4 『タニウツギ』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※発行：平成 28（2016）年 5 月 『ひょうご水百景』 No.60

改訂：令和 8（2026）年 5 月 『ひょうご水百景』 No.60